

輪島 KABULET の設計理念・手法とその評価
— 「ごちゃませ」理念に基づいた地域コミュニティ再生—
Evaluation of design principles and methods of Wajima KABULET
- Local community regeneration based on “Gochamaze” philosophy -

○西川英治*1, 山崎寿一*2, 今井貴俊*3

NISHIKAWA Eiji, YAMAZAKI Juichi, IMAI Takatoshi

This is a report on the regional community revitalization project conducted in Wajima City, Ishikawa Prefecture, located at the northern end of the Noto Peninsula. We designed architecture using vacant houses and vacant land. We planned a place where diverse people from the elderly to the toddlers could gather, regardless of their disability. Analyze and evaluate the design principles and methods of community development in the town-type Japanese CCRC.

キーワード：ごちゃませ理論, 空き家・空き地活用, 地域コミュニティ再生, タウン型日本版 CCRC
Keywords: *Gochamaze theory, Vacant house renovation, Regional community revitalization, Town type Japanese CCRC*

1. はじめに

本論文は石川県輪島市で行った「タウン型生涯活躍のまち（日本版 CCRC）」による地域コミュニティ再生プロジェクト『輪島 KABULET（以下、輪島カブーレ）』の計画論をまとめたものである。まち・ひと・しごと創生本部発表の「生涯活躍のまち」構想（最終報告）によると、『「生涯活躍のまち」構想は、「東京圏をはじめとする地域の高齢者が、希望に応じ地方や「まちなか」に移り住み、地域住民や多世代と交流しながら健康でアクティブな生活を送り、必要に応じて医療・介護を受けることができるような地域づくり」を目指すものである。』¹⁾と示されている。社会福祉法人佛子園で進めた「生涯活躍のまち」構想では地域住民、多世代に加え障がい者も交流することが特徴である。

2007年の能登半島地震で輪島市中心部では震度6強から6弱を観測し大きな被害を受けた。輪島市の住宅被害は全壊513棟、半壊1,086棟、一部損壊9,988棟であった。この地震の影響で過疎化が一層進み市内中心部には現在でも住宅を取り壊した後の空き地が散見される。

本計画では市内に多数存在するこうした空き家・空き地の積極的な活用を行っていることが大きな特徴といえる。

2. 輪島市の人口動態

輪島市は1950年頃から人口減少に転じている。国勢調査によると人口のピークが1950年の60,399人であり、高度成長期、バブル期に大きく人口が減少し、社会的要因による減少が見て取れる。近年では2007年の能登半島地震の影響で大きく減少している。2015年の国勢調査では27,216人となっておりピーク時の45%まで減少している。今後は2040年に15,440人まで減少し、ピーク時の25%になると予想されている。（図1参照）人口増減率は-8.85%であり、全国平均の-0.75%と比べると非常に高いことがわかる。

次に輪島市中心部の人口動態についてまとめる。ここでは輪島市中心部の定義を旧輪島町（河井町、鳳至町、海士町、輪島崎町）とする。中心部は1955年の16,269人をピークに人口減少に転じている。2015年の国勢調査では人口7,101人となりピーク時の44%まで減少している。（図2参照）出生数、死亡数の差し引きを上回る人口が減少しているため、社会的要因による輪島市外への転出が多いことがわかる。市全体の高齢化率は2015年の国勢調査より43.10%であり、全国平均の26.60%を大きく上回る。この数値は全国1,724市区町村の内125番目である。（図3参照）輪島市は人口減少、高齢化といった日

*1 株式会社 五井建築研究所、代表取締役

*2 神戸大学大学院工学研究科、教授、博士（工学）

*3 株式会社 五井建築研究所

CEO, GOI architecture & associates

Professor, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Dr.Eng.

GOI architecture & associates

本の地方が抱える共通の問題が顕著に表れている地域といえる。

輪島市の人口推移予想

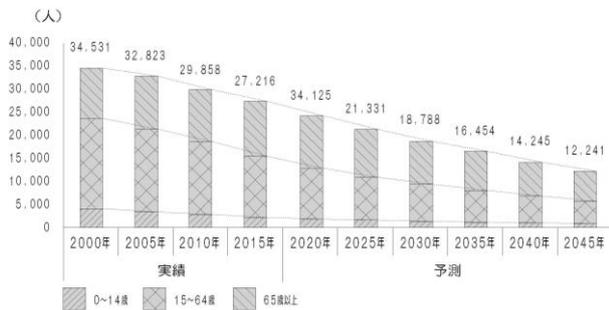


図1：輪島市全体の人口推移⁽²⁾



図2：輪島市中心部の人口推移

輪島市の高齢化率推移予想



図3：輪島市全体の高齢化率推移⁽²⁾

3. 輪島 KABULET の概要

3-1. 計画理念

輪島カブーレプロジェクトは「生涯活躍のまち」構想に基づく「タウン型」に分類される。「タウン型」とは主として地域のソフト・ハードの資源を一体的・総合的に活用するタイプ³⁾であり、空き家、空き地といったハードを活用しながら行う地域コミュニティ再生プロジェクトである。ここに至るまでに私たちは社会福祉法人佛子園が運営する share 金沢、B's 行善寺の設計を手掛けて

きておりそれに続く第三弾である。この三つの施設はいずれも「生涯活躍のまち」構想によるものであり、ここでは「ごちゃまぜ」という考え方を施設整備において標榜している。「ごちゃまぜ」はソーシャルインクルージョンと同意として捉えられているが厳密にいうと違った意味合いが付加されていると考える。ソーシャルインクルージョンは「すべての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう社会の構成員として包み支えあう」⁴⁾と定義されるが、ここでいう「包み支えあう」を制度としてではなく心の能動的な働きとして捉えているのが「ごちゃまぜ」といえる。即ち生きとし生ける物すべての人々が混ざり合うことで相互に関わり合いを持つ関係性を創り出し、お互いに刺激し合うことで今まで体験し得なかったような共感性を呼び起こし前向きに生きようとする心の様態を醸成することを目指しているのが「ごちゃまぜ」である。

3-2. 既往の取り組みと輪島 KABULET の特徴

「生涯活躍のまち」構想の先行事例として株式会社コミュニティネットが運営するサービス付き高齢者向け住宅「ゆいま〜那須 (2012)」がある。法政大学高尾真紀子氏は都市部から移住した高齢者の意識調査、介護保険制度についての視点から「生涯活躍のまち」構想について述べているが⁵⁾、私たちは地域住民、多世代、障がいの有無に拘らず全ての人が交流する地域拠点づくりを目指し「生涯活躍のまち」構想を実践してきた。高尾氏も「ゆいま〜那須」の課題としてこの点を挙げている。

次に私たちが実践してきた過去2つの「生涯活躍のまち」構想から得た知見を述べる。

一つの地域を集中的に整備する「エリア型生涯活躍のまち」構想³⁾である share 金沢では周囲の住宅街との関係が希薄になり、周囲の街並みから切り離された印象が生まれた。これは郊外の3.5haの広大な一つの敷地に完成された街を創り上げたことで他者が入りにくいものとなったと考える。

2つ目のB's 行善寺では「タウン型生涯活躍のまち」構想を実践した。既存の住宅地の中に整備したことが地域住民の日常的な利用をすすめる環境づくりに対して重要な役割を果たしている。また隣接するお寺の持つ和の雰囲気踏襲したデザインとし、道路に近い部分の建物ヴォリュームを周囲の住宅に合わせて低く抑えることで新築でありながら既存の街並みに違和感なく溶け込むことができています。

この2つの取り組みから輪島カブーレでは既存の住宅

地の中に立地する「タウン型生涯活躍のまち」構想が「ごちゃまぜ」の施設整備に適していると考えた。震災、過疎化により市内に散見される空き家、空き地といった外部不経済の要因を地域住民の拠り所となる施設へ創り換えていくことで、まち全体の活性化を図る本計画は社会的に意義があると考え。過疎化が進む地方での空き家、空き地を活用した「生涯活躍のまち」構想は前例のない新しい取り組みである。

3-3. 運営上の特色

輪島カブーレプロジェクトの運営上の大きな特色は運営主体に JOCA（公益社団法人青年海外協力協会）が入っていることである。福祉運営を幅広く手掛ける社会福祉法人佛子園の指導の下に世界各地で地域の発展に尽くしてきた JOCA のメンバーを全国から公募し、集まった 14 名の職員がこのプロジェクトの立ち上げから運営まで進めたのである。（五井建築研究所からも所員 1 名輪島に移住し輪島カブーレの仲間入りした）そこに輪島市、輪島商工会議所が協力し官民一体となって事業が進められた。

3-4. 「ごちゃまぜ」を実現する建築計画

当初より輪島カブーレプロジェクトは「ごちゃまぜ」理論による市街地全体の活性化を目指しており拠点施設を地域コミュニティの中心に据え福祉施設の他住民サービス・観光サービス施設を市街地全体に分散配置する計画としている。輪島商工会議所が取り組んできたカーポートを活用した新交通システムを使い拠点施設と各施設を結ぶことを前提に計画を進めた。

敷地設定のために我々は市内の空き家調査を実施した。プロジェクト発足当初輪島市より区長への空き家ヒアリング調査結果を受領し地図上にプロットした。この情報をもとに 3 度フィールドサーベイを行い空き家、空き地の確認、街の雰囲気、人の様子を調査した。調査の結果いくつかの候補地があった。そうしたうえで（図 4 参照）

- ①既存住宅地の中であること
- ②空き地空き家が集積している場所であることを計画の前提として絞り込み施主と共に行った 4 度目のフィールドサーベイの際、社会福祉法人佛子園雄谷良成

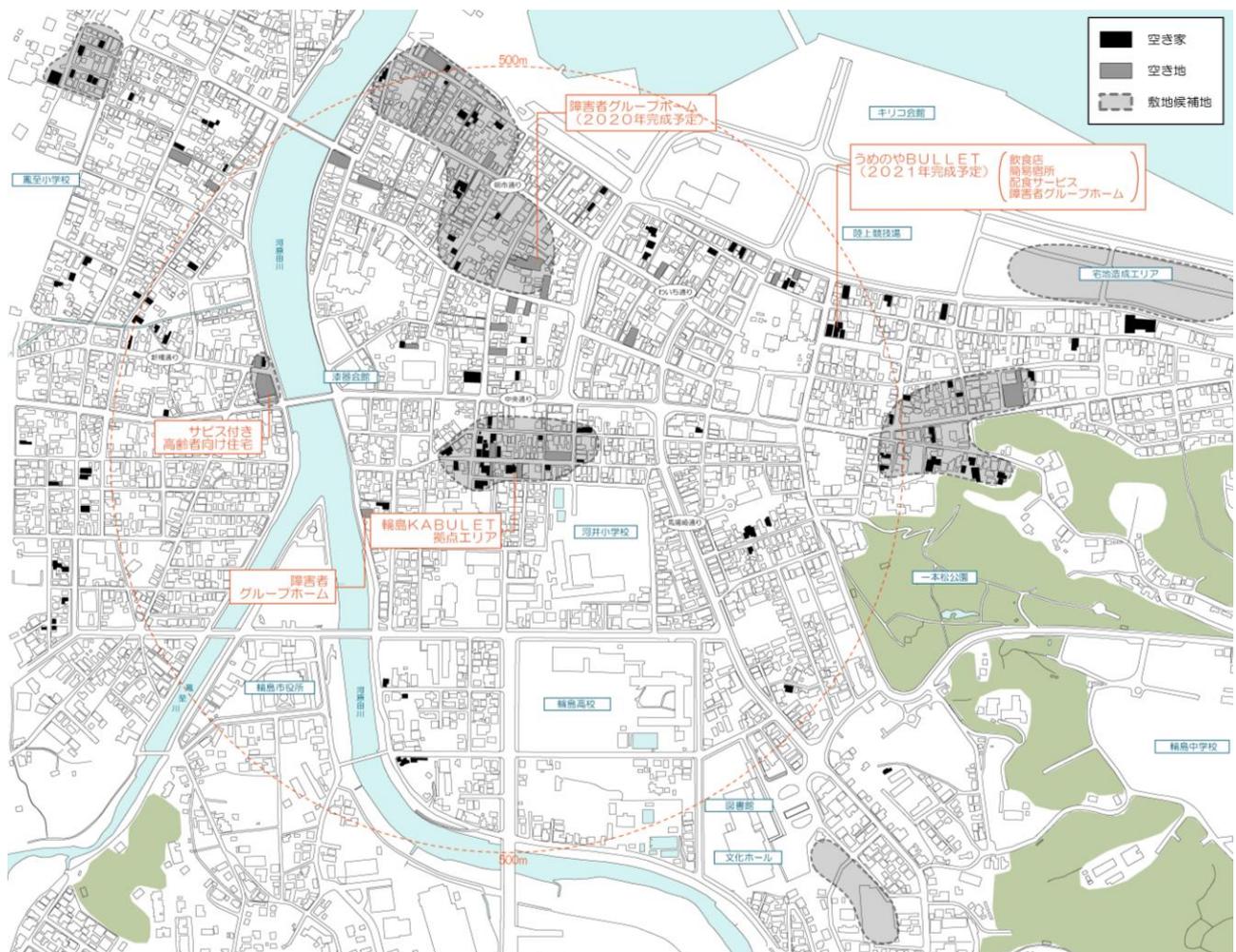


図 4：空き家、空き地調査結果と候補地

理事長の判断により河井町中心部で計画を進めることとした。その中で土地買収の進めやすさや近隣住民の理解など様々な要素が加わり、最終的に現在の敷地に決定した。拠点施設の計画地は輪島の中心市街地で古くからの一般住宅地である。拠点施設に土地を所有していた高齢の住民が土地を提供しカブールのサ高住に入居する、あるいはShare 金沢にあるサ高住の住人が故郷の輪島カブールのサ高住に引越すなどの物語が生まれている⁶⁾。

今まで私たちが取り組んできた社会福祉法人佛子園のプロジェクトは「ごちゃまぜ」理論に基づいて失われた地域コミュニティの再生を目指したものである。こうした理論が空間計画上どのような手法によって実践されていくのか具体的に論じる。

最も重要視したのは様々な人の出会いの空間の在り方

である。日常的に障がいを持った方々と健常者が違和感なく混ざり合っている風景を創るのは実はそこに存在する隔てのない空気といえる。そうした空気は人間の教条的な側面からは決して生まれえないし仮に生まれたとしても長続きするものではない。自然な形でそのような空気を醸成するには多様な人間の存在を認識し「ごちゃまぜ」の意味を深く理解している運営者（サービスする側）の精神（気持ち）のあり方に大きく依存しているといえる。そしてそれを助成し誘発する役割の一端を担っているのが建築であり、構えることのない人と人との「さりげない出会いの空間」を創ることが設計者としての大きな役割と考えた。そこで重要なことはいろんな人が混在していることを格別意識させない「空気」であり、そのために「空間の透過性」は極めて重要であると考えた。



図5：中核エリア全体平面図

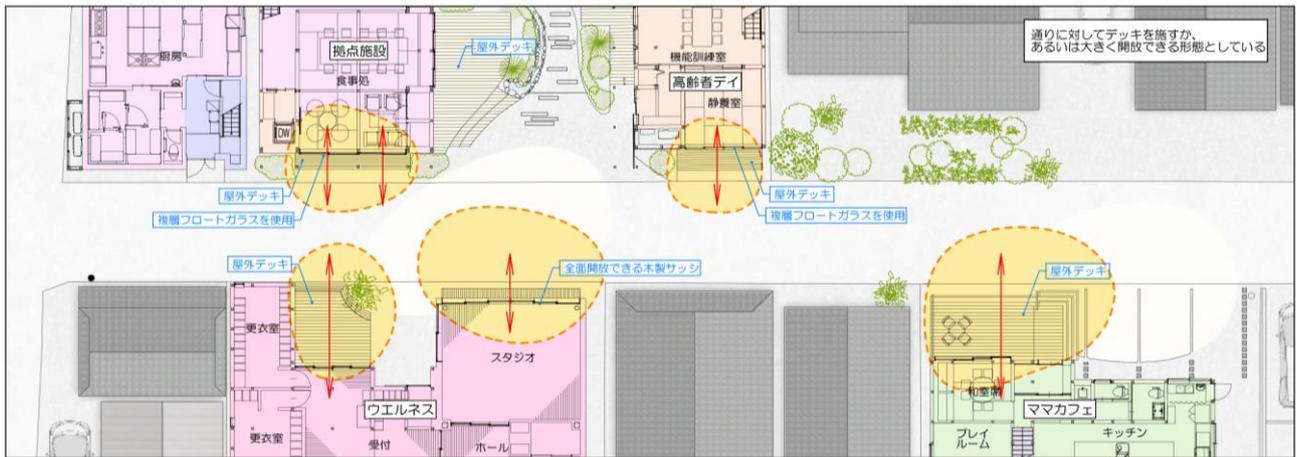


図 6：通りへの開き方

実社会において様々なバリアに阻まれた人びとが混ざり合い行動する姿がひとつの親愛感に満ちた風景として認識されるには一般的な挨拶ひとつとっても自然の流れの中にあることが重要であり、それは透明感のある空間ではより効果的に発揮できると考え「ごちゃまぜ」を実現するための手段として「空間の透過性」を本建築の大きなテーマに据えている。また優れた伝統文化を残しながら過疎化が進む輪島という地域性を捉え表現することは日本の地方文化を継承する上で極めて重要であるという思いから、随所に地域特性が表出する建築デザインを取り入れている。このことも地方で活動する設計者として重要なテーマであった。さらに地域の既存建築をそのまま利用することで地域の風景を残したいという思いから既存建築を出来る限り残存させている。その経緯と課題について述べたいと思う。以下順に記述する。

3-4-1. 空間の透過性

① 空間の透過性 I —内外空間の透過性

メインの通りに面して拠点施設、ウエルネス、高齢者デイ、ママカフェを配しているがいずれも通りを行く人々と積極的な関りを持たすことを重要視している。各施設の前面には屋外デッキを施すかあるいは通りに対して大きく開放できるかいずれかの手法によって内部の活動が外から窺い知ることが出来るようにしている。例えばウエルネス 1 階のスタジオでは通りに対して全面開放できる木製サッシとしており天候に恵まれた時には開放して使用している。夏休みには児童たちのラジオ体操の場として前面開放して使用され、通りにはみ出した活動は地域に元気を与えている。また食事処においても窓は大きく通りに開かれており約 90 cm 高くなったテーブル席から眺める通りの風景は心地よい。サッシのガラスは環境面を考えた Low-e ガラスではなく複層フロートガ

ラスを使用することでより透過性を高めている。(図 6 参照)



図 7：中庭への開き方

拠点施設は動線を奥の方に引き込んでいる。このアプローチ路は通り向かいのウエルネス、隣接する高齢者デイに囲われておりここには温泉水を利用した流水と緑を配し程よい広さの落ち着いた外部空間となっている。ウエルネスの運動している人たち、高齢者デイの休憩している人たち、拠点施設で食事をするあるいは足湯に浸かっている人たちと三つの施設から人々の視線が集まる最も界限性の高い場となっている。透過性が高い空間は一方で落ち着きのない空間に陥りやすいがこの前庭は横幅約 9m、奥行き約 20m、高さ約 7m の建築に囲われており

程よい親近性によりそうした印象を免れている^{注1)}。(図7、8参照) 界限性があり且つ落ち着きのある雑多な空間が透過性の高い空間計画により共生することで「ごちゃまぜ」が機能しやすい場所を創り上げている。

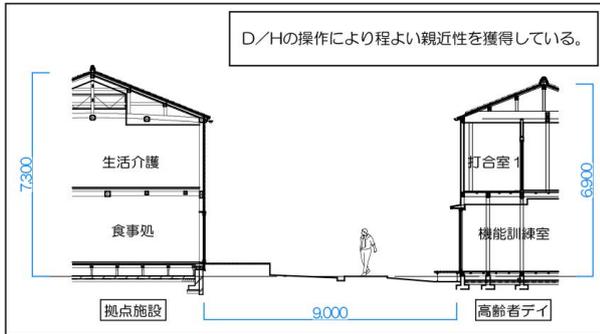


図8：中庭のD/H

② 空間の透過性Ⅱ—内部空間の透過性

拠点施設の平面計画で最も重要なのは1階の空間の透過性である。人の集まりが集中する温泉と食事処とそれを結ぶ縦に長い廊下空間。この廊下は温泉を利用する人々と食事処を利用する人々、さらに2階の住民自治室や放課後デイ食事処の利用者、さらに3階のスタッフが常に交わる空間であり人の往来が激しい。ここでは近隣農家の人たちの野菜などが売られており廊下の賑わいを助長するように作っている。また食事処は前面通りに面して吹き抜けになっており通りとの関係性を強めている。(図9参照)

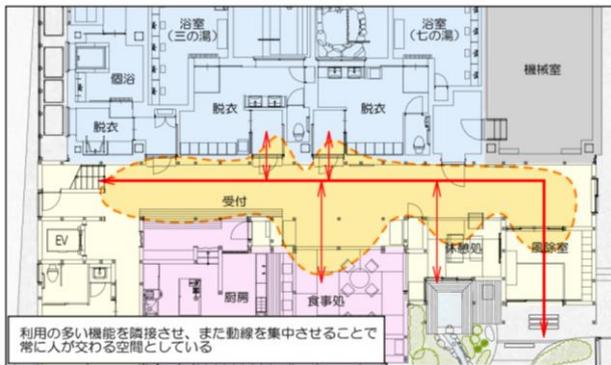


図9：常に人が交わる空間

こうした廊下は様々な人たちの出会いの場であり前述した「空気をつなぎ」を作り人びとを積極的にでもなく消極的でもないごく自然な形で結ぶ上で重要である。食事処は奥行き16m程度あり場所により空間の特性がある。廊下に近い手前の場は来訪者やカウンターのスタッフとの関係性が強く最も「ごちゃまぜ」を生み出しやすい場所である。奥に行くに従ってそうした関係性が薄

れ逆に外部空間との関係が強くなっていく。真ん中の10畳間はアプローチ路に設えられた園庭が眺められる場である。また奥の21畳の間は通りに面し屋外デッキをもつ外部とのつながりに最もポジティブな場であり内外空間を繋げる大きな役割を果たしている。こうして少しずつ性格を変えた食事処の空間が透過性が高いことで一体となり自然な形で結びついていることが違和感なく「ごちゃまぜ」を醸成する大きな力になっていると考えている。(図10参照)

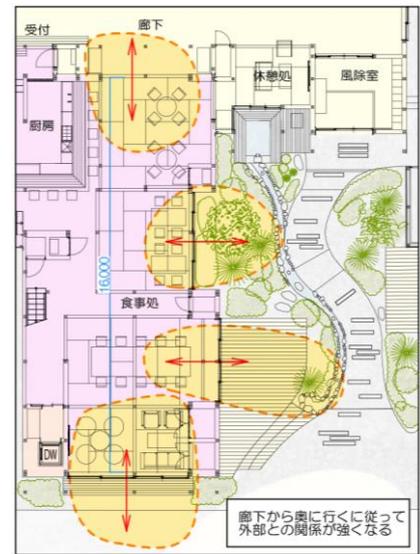


図10：食事処と外部の関係

3-4-2. 輪島の地域性を現わすデザイン

① 輪島塗の活用

鎌倉時代から室町時代にかけて発布された日本最古の海法廻船式目に日本の主要な港湾10カ所が三津七奏として記載されているが七奏のひとつが輪島である。温泉のふたつの湯はそうした歴史に鑑み「三ノ湯」「七ノ湯」と名付けている。内装デザインは輪島塗をテーマにした湯と海をテーマにした湯とした。輪島塗産業はバブル期の最盛期に比べ約20%程度に落ち込んでいるとはいえ輪島を象徴する産業であり水には強いが紫外線には弱いという性質から湯ぶねのかまちと内壁に使用することとした。漆はこの地域の建築によくみられる材料であるが浴室に使うことはない。漆の鈍い艶が支配する浴室のインテリアは建築の内部材料としての可能性を示唆していると考えられる。(尚、天井面は内装制限の規制で残念ながら使用できなかった。) (図11参照)



図 11：三の湯 漆の内装

② 能登ヒバを使ったデザイン

この土地の特産木である能登ヒバ（アテ）を意匠材として多様に活用した。外部においては各施設のデッキ床材として使用している。木の特徴は経年変化と腐食である。能登ヒバもその例に漏れないが元来湿気に強く建築の土台等構造体に使われており腐食することや強度が大幅に低下することがない優れた木材である。こうした特性からデッキ材に使用したものであり、近隣の公共施設の使用例から 20 年以上は耐え得ると考えている。

また、ママカフェにおいては能登ヒバを建築のひとつのテーマとして設定し床、天井、階段等の内装材として徹底的に使っている。特に柱の角材を使ってデザインした階段は能登ヒバを象徴的に扱った特徴のあるデザインとしている。（図 12 参照）能登ヒバから発する木の香りは心地よく消臭やアレルギー除去の性能も保有していることが判明している。能登ヒバの多面的な活用をアピールする場としてこの施設が貢献できれば幸いである。



図 12：ママカフェ 能登ヒバの内装

③ 地域を繋いできた材料の継続

敷地周辺は古くからの住宅地であり、前述した通り 2007 年の能登半島地震の影響を受け空き地空き家が増

えた地域である。伝統的に杉下見板押え縁張りや漆喰塗りが外装に使われてきており、近年新しく建てられる建築や改修する建築においてもそうした材質感や色調が概ね継承されてきたといえる。今回の輪島カブールの建築においてもそういった考えを踏襲している。拠点施設では元々あった建築に機能的に不足するものについては増築したが基本的には地域のスケールに合わせ通りに対して圧迫感が感じることのないようにセットバックしている。外装は木や吹き付けが主体であり元々あったと感じられる材料の選択、建築の配置を行っている。（図 13 参照）



図 13：建物がセットバックしている様子

④ 通りとの関係性を重視したその他のデザイン

計画地の通りは従来夜間薄暗くあまり歩行する人がいない場所であったが、施設を利用する近隣住民が安全で安心でき、かつ楽しく歩行できる通りを目指す。照明計画では通りに面した施設の照明が歩行する人々の目に入るよう取り付け高さ等において十分な検証を行い決定した。そうした照明の見え方が内外空間の透過性に大きく寄与していると考えられる。（図 14 参照）



図 14：外部からみる内部照明の様子

温泉を配置した西側の小路は配置の性格上閉じた印象を与え裏通りっぽさを感じさせていた。設計時にはあまり意識しなかったが工事中に徐々にそのことが気になりそれを是正する方策を練った。最終的に金沢美術工芸大学の関係者の協力を頂き地元の能登ヒバを使い輪島を題材にした壁面アートを施すこととした。その風景も徐々に地域になじんできているようである。(図 15 参照)



図 15：西側小路の壁面アート

3-4-3. 既存建築を活かした改修における経緯と課題

① 拠点施設の既存建築改修

既存の3階建ての混構造木造住宅（平成3年建築）及び2階建ての木造住宅（大正5年建築）をそのまま生かし、そこに木造と鉄骨造で増築することで繋ぎ、必要とされる機能を充足させたものである。古い部分と新しい部分を違和感なく混在させ木架構の力強さを見せるデザインとした。温泉部分は鉄骨造平屋建てとし屋上には各種屋外機械を設置している。

この温泉と既存部の間は木造2階建てを増築し繋いでいる。計画的には最もややこしい部分であったが、内外とも違和感なく連続させることが出来たと考えている。(図 16 参照)

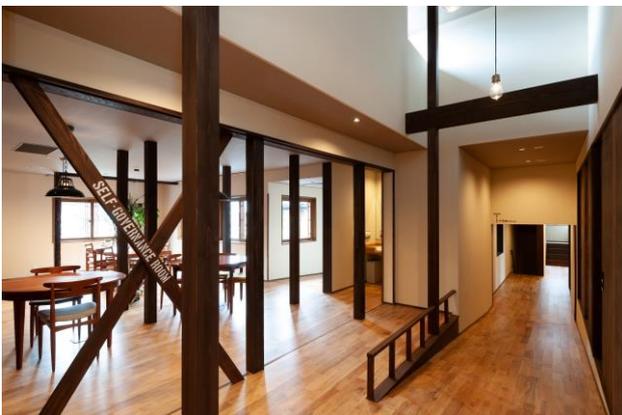


図 16：既存部と増築部が違和感なく連続した空間

② ウエルネスにおける既存改修

ここは既存の住宅を一部解体し鉄骨造で2階建てのウエルネス施設を建築している。既存部分の住宅（昭和44年建築）は相当風化が進んでおりまた基礎もない状態であり一度解体し基礎を構築し再設置したものである。既存部の改修における基礎の構築は工事的には難易度が高く金額的にも大きな負担となったことから今後も同様の改修においては要検討になる可能性が高い。地域らしさを保っていく上でも国の新たな施策が望まれるところである。(図 17 参照)



図 17：ウエルネス蔵の曳家の様子

元々の蔵部分は内部解体時に架構の力強さに気づき部現しのデザインに変更した。(図 18 参照) 前述したようにスタジオは通りに対してフルオープンにできるようにしている。

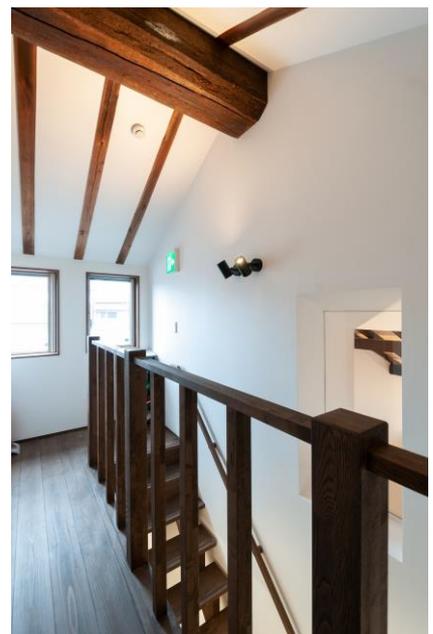


図 18：ウエルネス蔵の既存梁を活かした天井

③ ママカフェにおける既存改修

既存住宅を一部解体し若い子育て世代と幼児たちが一緒に料理を作ったりお茶を飲んだりするスペースに作り替えたものである。既存住宅（昭和 34 年建築）の基礎は無筋であることが現場で判明し木構造体を持ち上げ基礎を築造した。ウェルネスと同様にこうした改修は工事的にも金銭的にも負担が大きく今後の課題となっていくと考える。

3-5. その他街に点在する施設

その他の施設として現在サービス付き高齢者向け住宅（以下サ高住）、グループホーム、ショートステイの各施設が完成している。

サ高住は拠点施設から約 300m 程度離れた場所にあり住戸は 6 戸で単身者用の大きさである（33 m²）河原田川に面した眺望を活かすために通りから上った部分にリビングを設け居住者のみならず地域の住民がお茶を飲んだりできるスペースを設けているなど地域に開いた新しい構成としている。（図 19 参照）



図 19：サ高住共有スペース内観

また本年から来年にかけて 12 人収容のグループホーム兼ショートステイ及びゲストハウスが建設される予定である。このうちゲストハウスは昭和 22 年遊郭として建築されその後料理屋として長年使われていた建物を改修するものであり、この地においてもかなり個性的な外観を継承して国内外の来訪者を迎えるゲストハウスとして本年 7 月にはオープンする予定である。（図 20 参照）



図 20：ゲストハウス既存外観

4. 終章

4-1. 街の変化

この事業が完成して一年以上が経過し、明らかに街に変化が起きていると感じる。施設の利用者数のデータを見ると徐々に輪島カブールの認識と理解が街に広がっていることがわかる。（図 21 参照）この 4 月 30 日に開催されたオープン 1 周年の記念行事には多くの一般市民が駆け付け賑わいを見せていた（図 22 参照）

街の変化はこの事業の影響だけによるとは言えず外的な要因も大きい。2015 年 3 月に開通した北陸新幹線の利用状況は 4 年目に入った今年度においても減少していない。また近傍にある能登空港の利用率も上がっているというデータも発表されているなど、この地域に多くの観光客が入り込んでいることも大きな要素である。観光が単に名勝旧跡を巡る旅から体験型に変化しつつあり、恵まれた自然のみならず地方固有の文化が見直されていることが能登の集客力につながっていると思われる。また過疎地域においては自然や人情に恵まれより人間的な生活がおけると感じる若者が増えており、IT 社会の到来により情報格差がなくなっていることがそうした人たちの地方居住を後押しすると思われる。

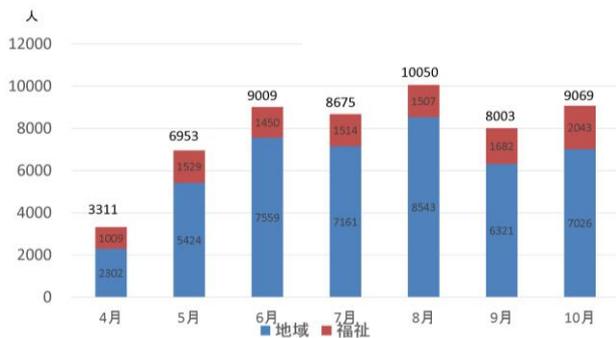


図 21 島 KABULET 来館者数推移 (社会福祉法人佛子園提供)



図 22 : 1周年記念イベントの様子

4-2. まとめ

私たちにとって輪島カブーレは share 金沢、Bs 行善寺に続く「生涯活躍のまち」の実践例であった。前の二つと大きく異なるところは人口減少が激しく高齢化率も高い過疎地であり消滅する地方自治体といわれる疲弊した地域であることである。

戦後日本の高度経済成長により日本の社会構造は大きく変化をし、地方の若者が労働力として大都市近郊に集められ団地やニュータウンに住み着いた。核家族化が進み地方の伝統的コミュニティが地域社会において失われていった。平成以降は日本のみならず世界中を席捲してきた弱肉強食のグローバル的価値観が社会格差を一層拡大させ、構造的な人口減少と相まってさらに地域社会の存立を危うくしてきた。そうした社会状況のアンチテーゼとして地域の生活や文化を継承していこうという地域主義や互いに助け合っていく社会を創ろうとする共助主義の考えが注目を集め共感を呼ぶことは必然の流れのようにも思う。輪島カブーレにおいてはこの疲弊した地域の伝統や文化を継承し地域固有のアイデンティティを大事にして障がい者、健常者、老若男女を問わず誰にとつ

ても暮らしやすい地域を創ることが目標であり、輪島は様々な外的要因と街の内的変化が合わさり元気になってきている。

輪島の例がひとつのモデルとして日本の過疎地においてこういった事業が推進されることを望んでいる。

注釈

注 1) 芦原義信：外部空間の設計、彰国社、昭和 50 年、P. 52～61 を参考に程よい近親性と判断する

参考文献

- 1) まち・ひと・しごと創生本部：「生涯活躍のまち」構想（最終報告）、平成 27 年
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所：日本の地域別将来推計人口（平成 30（2018）年推計）平成 30 年 12 月
- 3) 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局：「生涯活躍のまち」構想に関する手引き（第 3 版）、平成 28 年 4 月、P. 23～25
- 4) 社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のありかたに関する検討会：「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のありかたに関する検討会」報告書、平成 12 年
- 5) 高尾真紀子：日本版 CCRC の課題と可能性-ゆいま〜るシリーズを事例として-、法政大学地域研究センター、2018
- 6) 小林純、山崎寿一、山口秀文：地域密着型サ高住における居住者特性と地域との関係に関する考察-地方小都市における高齢者居住システムに関する研究-、日本建築学会住宅系研究報告論文集 13 p81 -90、2018